

鬼平犯科帳

9

池波正太郎



文春文庫



文春文庫

鬼平犯科帳(九)

定価はカバーに
表示してあります

1981年3月25日 第1刷

1989年12月5日 第16刷

著者 池波正太郎

発行者 豊田健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-714222-8

文 春 文 庫

鬼 平 犯 科 帳
(九)

池 波 正 太 郎



文 藝 春 秋

目次

雨引の文五郎

鯉肝のお里

泥亀

本門寺暮雪

浅草・鳥越橋

白い粉

狐雨

解説——中桐雅夫

291 249 208 169 125 84 47 7

鬼平犯科帳

(九)

あまびき ぶんご ろう
雨引の文五郎

一

秋も、深まってきた。

役宅の、奥庭の一隅いちぐうに長谷川平蔵みずから植えこんだ梅擬うめもどきの小さな実も、赤く熟して、

「この梅擬が実をつけるのを見ると、やれやれ、もう一年たったか……そうおもうのだよ」

ためいきのように平蔵がいうのをきき、何かいいさした妻女の久栄ひさえが急に、口をつぐむのを見やっ

「何だ？」

「いえ……別に……」

「何かいいかけてやめるといふのは、おもしろくない」

「まあ、お気のむずかしいことを……」

「おれが、当ててみようか。いま、お前がいいかけたことを……」

「およしあそばせ」

「年寄りくさいことを……と、そういいたかったのであろう、どうだ？」

「おそれいりましてございます」

「うふ、ふふ……」

さて、その日の午後……。

例のごとく、単独の巡回の途中に、本所^{みろくじ}弥勒寺門前の茶店「笹や」へあらわれた長谷川平蔵を見ても、笹やの女あるじ・お熊は、すぐにそれとわからなかった。

今日の平蔵の変装は、いつもの編笠をかぶった浪人姿ではない。

うすよごれた網代笠^{あじろがさ}に深ぶかと面をかくし、墨染めの衣^{ころも}に白の脚絆^{きゃはん}。丸ぐけの石帯という扮装^{いでたち}で、旅の老僧に化け、四尺余の竹杖^{たけづえ}をつき、とぼとぼと歩む姿を見たなら、妻女の久栄でさえ、これが平蔵とは気がつかなかったろう。なかなかどうして、堂に入ったものだ。

網代笠もぬがずに「笹や」へ入って行つた平蔵が、托鉢^{たくはつ}の態で経文^{きやうもん}を唱えはじめるや、むかしなじみのお熊婆あがいきなり、

「場ちがいなところへ、面^{つら}あ出すな」

塩辛^{しおからこえ}声で、怒鳴りつけてきた。

たとえば姿は見すばらしくとも、いやしくも僧侶に対して、このような暴言を吐くというのは、

そのころの人びとにはなかったことである。

だが、世の辛酸しんさんをなめつくし、七十をこえて風の骨のような老婆となり、亭主もなければ子もなく、親類縁者もないというお熊にとっては、世の人であるかぎり、將軍であろうが大名であろうが、僧侶、町人、百姓から土地とちの無頼ぶらいどもにいたるまで、

「みんな、同じだ」

なのであった。

怒鳴りつけられて尚なお、旅僧が経文を唱えつづけているものだから、

「うるせえじゃあねえか。そんな不景氣な声を出されたのじゃあ、客も寄りつかねえ。さっさと出て失せろ」

近寄って来て惡態あくたいをつくお熊の眼の前で、平蔵が網代笠をあげ、顔をのぞかせた。

「あれ、ま……」

お熊は、瞠目どうもくした。

僧形そうぎようであつても、坊主頭になつていたわけではない。

「鍔つつあん。こいつはあんまり、粹狂すいきやうというものじゃあねえかよ」

と、いまを時めく火付盜賊改方の長官・長谷川平蔵に向つて、このように遠慮えんりよ会釈えしやくのない口をきくお熊に、平蔵は放蕩無頼ほうとうむらいの若き日、いろいろとめんどろを見てもらったことがある。

「まあ、いいじゃあねえか」

平蔵も、むかしの口調になり、

「それよりも喉のどがかわいた。まずい渋茶でもふるまってくれ」

「銭もはらわねえで、いい気なものさ」

「あは、はは……」

他に、客はいなかった。

弥勒寺前の通りが見わたせる店先の腰掛けにかけた平蔵が、お熊が出してくれた熱い茶に喉をうるおしていると、客が二人、三人と入って来た。

客を、

「客ともおもわぬ……」

お熊なのだが、手づくりにして出す「焼だんご」がなかなかにうまいとかで、これをわざわざ食べに来る客もすくなくないという。

その焼だんごを、平蔵も出してもらい、一口食べて何気なく表通りを見やったとたんに、

（や……？）

かぶったままの網代笠の中で、平蔵の眼が、きらりと光った。

いましも……。

二ツ目橋の方かたからやって来た町人が、平蔵の眼の前を通りすぎ、弥勒寺橋のほうへ足早に行く。その男の顔を、平蔵は、忘れるものではなかった。

こやつ、雨引の文五郎という盗賊で、一昨年の夏に、長谷川平蔵は煮え湯をのまされている。

（きやつめ、また、江戸へ舞いもどって来たか……）

文五郎の後姿から眼をはなさず、平蔵がお熊へ、

「婆さん。また来るよ」

声を投げておいて、立ちあがった。

「たまには、酒でも買って来ておくんなよう」

お熊の悪態を背にききつつ、歩み出した平蔵のうしろから、四十がらみの、がっしりとしたからだ躰からだの町人ふうの大男が、平蔵を追い越して行った。

二

雨引の文五郎は、まだ三十をこえたばかりだが、盗賊界では、

「隙間風」
すきまかぜ

と、異名いみようをとった男だ。

その異名のごとく、これぞと目星めぼしをつけるや、どこからともなく忍びこんで「盗みばたらき」をしてのける。

文五郎は、ほとんど単独で盗めつとをする。

どうしても「ひとりばたらき」ができぬ場合は、一人か、せいぜい二人ほど、自分の眼鏡にかかった「ながれづとめ」の盗賊を仲間にするのであった。

見たところは、小柄な、まことに不恰好な躰つきで、その矮軀わいくの上へ、躰の半分はあろうとおもわれる大きな顔が乗っている。

いわゆる「馬面」^{うまつら}というやつ。鼻も顎^{あご}ものびるだけのびた長く大きな顔で、笑うと左の頬^ほに笑くぼが浮かび、なんともいえぬ愛嬌^{あいきょう}があった。

こういう特徴^{とくちょう}のある風貌^{ふうぼう}なのだから、人の眼につかぬはずはない。

はずはないのだが、実際に文五郎の顔を見た者は、あまりいいものだ。

彼に金を盗まれた商家の人びとも、だれ一人、見てはいない。ねむりこけている間に、こっそりと盗んで煙りのごとく消えてしまう。それなのに、長谷川平蔵は何故、道を行く文五郎をひと目見て、それとわかったのか……。

一昨年の春から夏にかけて、雨引の文五郎が久しぶりで江戸へあらわれ、連続的に犯行を重ねた。

どうして彼の犯行であることがわかったかという、目的を達して消え去る前に文五郎は、幅五寸、長さ七寸の紙へ「鬼花菱」^{おにばなびし}の紋章を黒地に白で、その下へ「雨引文五」の四文字を朱^{しゅ}で刷りこんだ木版^{もくはん}の名札^{なふだ}を、かならず残してゆくからである。

この名札を、平蔵が盗賊あがりの密偵たちに見せると、知らぬ者もいたが、相模^{さがみ}の彦十や大滝の五郎蔵などは、すぐに、

「あ、そいつは雨引の文五郎でございますよ」

と、いったものだ。しかし彦十や五郎蔵ほどの、盗みの世界での経歴が古い連中でも、文五郎の顔は見たことがないという。

そして雨引の文五郎は、これまで、押込む先ざきで、只の一人も殺傷したことはないと見てよ

い。

ま、それはさておき……。

平蔵をはじめ火盜改メの一同は、血眼ちまなこになって文五郎を捕えようとしたが、だめであった。將軍おひぎもとの、江戸市中の四方八方を荒しまわること十二件。

ついに、御繩にすることができぬまま、文五郎は江戸から消えてしまった。

盗まれた金は、合せて五百両ほどであつたろうか。

単独の犯行であるから、一件についての金高は、びっくりするほどのものではないのだ。

さて、そこで……。

文五郎め、江戸を去るにあたって、なんと、自分おのれの人相書にんそうがきを役宅の長谷川平蔵宛にとどけてよこしたのである。

一昨年の夏の或日。

その人相書を、役宅の門番へとどけに来たのは、神田橋・御門外に出ていた水売りの老爺ろうやであった。

水をのんだ客から、

「これは、お上かみのたいせつな御用なのだから……」

といわれ、風呂敷に包まれた細長い桐きりの箱を、役宅へとどけに来たのだ。

老爺は、駄賃だちんに金二分ぶをもらったそう。

門番が、老爺を引きとめておいたので、桐箱の中に巻きおさめてあつた文五郎の人相書を、平

蔵が老爺に見せると、

「へっ……こ、このお人でござりますよ。こちらへ風呂敷包みをとどけろ、と、いったお人は……」
老爺は、目をみはった。

人相書は、極彩色ごくさいしきの肉筆で、実にみごとなものであった。

その文五郎の肖像には「雨引文五」の四文字が達筆にしるされてい、さらに、なんと、

「鬼平さん、またのお目もじまで、さらばさらば」

と、書きそえられてあった。

「しゃれたまねを……」

いいはしたが平蔵、あまり、よい気もちではなかったのである。

そして、二年後のいま……

弥勒寺門前を通りすぎる人相書そっくりの男を笠の内から目撃し、長谷川平蔵は尾行を開始したのである。

雨引の文五郎は、弥勒寺橋をわたり、南へまっすぐに行く。
足が速い。

さすがの平蔵が、いささかも目をはなせぬ。

文五郎が高橋をわたり、小名木川おなぎ沿いの道を東へ曲がった。

（これは、うまいぐあいになってきた……）

網代笠の内、平蔵は北叟ほくそ笑んだ。

この道を十町ほど先へ行けば、盗賊改方の密偵・小房の糸八くめはちの船宿「鶴や」がある。はじめ平蔵は、

（いきなり、文五郎めを引っ捕えてしまおうか……）

とも、考えた。

それなら、

（わけもないこと）

なのである。

いかなる怪盗といえども、白昼の路上に、一対一で見かけたからは、とうてい平蔵の御縄を逃れることはできない。

（だが、待てよ）

尾行するうち、平蔵に欲が出た。

雨引の文五郎だからといって、いつもいつも単独の「盗め」をしているとはかぎらない。

もしも文五郎を助け、これから江戸市中で盗めをする盗賊がいるのなら、ぜひとも、

（そやつらも、いっしょに引っ捕えたい）

のである。

それというのも、文五郎ほどの盗賊なら、捕えて拷問ごうもんにかけてみても、めったに、

（口を割るまい）

と、感じたからだ。